



第5号

昭和61年10月

古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

定期講演会開催のお知らせ

演題 「古代王朝と近世文書」

日時 11月30日(日)午後1時入場

受付。1時30分開演。

場所 東京都勤労福祉会館(中央区

新富1の13の14。Tel 03-552-

九一三一番。地下鉄日比谷線

八丁堀駅下車、徒歩一分)

会費 千二百円(会員は千円)

講演要旨

内容は、記紀・風土記にあらわれ
る古代伝承の研究成果を踏まえ、関
東を中心として記紀・風土記と近世
の文獻(甲斐古蹟史、高崎の多胡碑
に關する文書、香取神宮古文書等)
に現われる古代史を明らかにします。

古田先生の還暦祝いパーティー開催

八月九日(土)神田の学士会館で

開催の古田先生還暦祝いには48名の

会員のご出席をいただき、盛大なパ

ーティーとなりました。

席上、出席会員ならびに有志会員

皆様から頂戴いたしましたお志は、

事務局で相談いたしました。終生残

るものとして日本工芸会正会員谷川

菁山氏作「青陶壺」を贈呈いたしま

した。

贈呈後、先生の感謝の言葉があり

現在の心境、古代史研究への取組み

状況、そして、立川の朝日カルチャ

ーで講演中の書紀神代上、「一書」の

研究成果につき報告があり、そのあ

とパーティーに入り、先生の生い立

ちや奥様との出会いの話など心が

和む話に終始しました。

古田古代史セミナー開催中

大和なる天皇家中心の「多元史観」

を捨て、「多元史観」に立つとき、風

土記に記録された古代伝承は真実の
歴史に光を当てる。

朝日カルチャーセンター主催で、

古田氏の古代史セミナー「風土記の

史と真実」が十月十三日を初回に全

八回にわたり講演会開催中です。

八講座スケジュール

古代伝承の史と真実 十月十三日

出雲風土記の史と真実 十月三十日

十月二〇日、二七日、十一月十日

常陸風土記の史と真実

十一月十七日、十二月一日、八日

筑紫風土記の史と真実

十二月十五日

〇場所 新宿住友ビル四階

〇お問い合わせは朝日カルチャーセン

ターへTel 03-344-1941番

前回の定期講演の内容

八王子市 谷本 茂

六月八日、神田の通運会館におい

て、「多元史観の新発見」と題して

古田武彦氏の定期講演会が開催され

一二五名の参加で盛会でした。

主なテーマは、

(一)多胡碑の削除問題

(二)出雲風土記の新解釈

(三)三経義疏の撰者は聖徳太子か

の三つでした。

まず、導入部で、上野三碑の一つ

多胡碑について、重大な発見が報告

されました。五月に、読者の人達と

訪れた多胡碑の現地で、現存碑文の

面以外の面にも文字が部分的に存在

するといふ事実が発見されました。

当然、もとの碑文なのか、後代の落

書の種類なのか問題となると、今

「古京遺文」「家楽遺文」など、今

までの史料集では、碑文は一面で完

結しているとして扱われています。

古田氏は、現存碑文の構成を詳細
に検討した結果、他の三面にも、も

とは文字が刻まれていたはずとの結

論に達しました。つまり、削り取ら

れた碑文のかすかな残りが今回発見

された文字であるということになり

ます。(この問題については、講演

後、新しい発見が続出したというこ

とです。秋の講演会が楽しみです。

次に、前半のテーマとして、出雲

風土記の「朝廷」「国造」という用

語について、今までの解釈に疑問が

出されました。従来は、一元史観に

もとづいて、何の疑いもなく、「大

和朝廷」「出雲国造」と理解されて

いましたが、文章の内容を詳しく検

討してみると、どうも従来の理解で

は矛盾が出てきます。

この矛盾を解決するには、多元史

観の立場しかないことを古田氏は力

説されました。さらに、出雲風土記

仁多郡の説話に、古代の鉏毒被害が

存在することを指摘され、参加者の

感銘を誘いました。

休憩をはさんで、後半は、一転し

て、聖徳太子撰という三経義疏の史

料批判です。

従来の聖徳太子真撰説・偽撰説い

ずれも、その立論の根拠の不充分な

ことを指摘し、古田氏独特の綿密な

史料批判により、この問題にアプロ

ーチされました。そして、法華経義

疏の原本成立は、六世紀中頃まで

、すくなくとも七世紀より前であり、

聖徳太子の真撰ではありえず、太子

は、この本の収集者であったという

驚くべき結論を導かれたわけです。

今後の古田説の展開が注目される

ところ です。

玉菱鏡石

杉並区 吉田堯躬

「古代史を疑う」の中で古田先生は、日本書紀の崇神紀六十年条の出雲振根殺害譚について、近畿天皇家の史実ではなく「吉備王朝」の史書から盗み挿入したものであること、同説話中の神宝は、玉菱鏡石であり、黒曜石と考えられると論じられた。前者については、すでに「古代史の宝庫」中の論文で示唆されており、また、「盗まれた神話」の論理からも首肯されるが、後者については私にはなお疑問があるのでそれを示してみたい。

疑問の第一は、古田説だこの物語は「神宝奪取―返却譚」と理解することになるが、それでよいかという点である。何故なら、神宝＝鏡石と解すると、祭りの断絶及び復活を神宝の奪取、返却とからめざるを得ない。

しかし、紀の文面は、出雲振根を誅すと書いたあとで「故、出雲臣等、是の事に畏りて、大神を祭らずして問有り」としている。神宝を失っても出雲振根生存中は祭りは行われたと解すべきで、その祭りの実施者神宝取上げに反対している勢力の殺害に畏れ入って祭りが絶えたと読む方が自然である。

従って、神宝の返却がなくとも、神宝奪取者の許可或いは誘導があれば大神を祭ることが復活できるのである。紀に神宝の現在地が示されていないのも、返却して復活したのでないことを意味しないだろうか。疑問の第二は、玉菱を玉藻と解してよいかという点である（この点は

従来説への疑問でもある。菱を水草のあざとすると、花の色は黄色であり、葉の色は緑又は紫であり、黒曜石の色を形容するものとして適わしくない。形とすると、ハート形であり、玉のようなハート形では意味不明である。

諸橋の大漢和辞典には、菱は第二義に「棺の羽かさり。鬘と同じ」とある。鬘は「ひつぎかさり。古は羽を以て飾る。漢代は木を用いて方形を作り、白布を張り、龍…雲等の飾を施す。柄を加えて持して葬に従わしめ、葬り終れば墓に立てる」とされている。

鏡石を大神を祭る場にある石、または大神そのものとすれば、それが玉のひつじかさりで飾られることは容易に想像される。神宝は天より降りて来ているので黒曜石であろうが鏡石は大神の横たわる聖地―私の想像では出雲振根の祖先神を祭る物像ではなからうか。

なお、菱の字はこの物語に二度出ており、前出は水草であることに疑いはない。ところが後出の鏡石の際には「菱、此云毛」の注がある。用法が異なるからではなからうか。

第三に、小児の言の読み方であるが、甘美御神、底宝御宝主が繰り返しになっている点からみて、その前の句の「真種の甘美鏡押し羽振る」と「山河の水泳る御魂静桂かる」とは対句で読むべきでなからうか。すなわち、真種の甘美鏡を押し羽振っている甘美御神、山河の水泳る御魂を静掛けて甘美御神ということ、御神の生前を彷彿せしめる句と読める。古田説では、押羽振るが除

外されて理解せざるを得なくなっている。以上、私の疑問へ大方の御教示を頂ければ幸いである。

縄文の石神「立石」をたずねて

港区 安彦克己

古田先生がその著書の中で「出雲風土記に伝える『大なる石神』は実在していた」と述べられ、また講演会で「その巨大な石神の前に立った時思わずそこに跳きたくなったような雰囲気でした」とお話になった立石の部落に行つたのは「出雲王朝の原点を探る」四泊五日の最終日だ。



縄文の石神「立石」

一行は立石部落に向けて五月の朝日を受けてきららに映える宍道湖を左に見ながら島根半島を西に進む。途中、一畑の地でタクシーに分乗。立石の部落が小深い場所に在ることを想見し、まだ見ぬ巨石神に更に思いをめぐらしたのは私一人か。地元

の運転手でさえ知らぬ山道を左に折れ、時折眼下に黒目、庄部の部落が見下せる。程なく山道に沿って車は止る。ここ立石は道沿いに二・三軒の家があるだけの散村。一行は今来た山道を折れ、小道を下り、峠道の草を踏み山陰を開ると、木立の暗影

に囲まれて巨大な石神は肅然としてそのたたずまいを現わした。二〇坪程の広場の前面に、高さ十

米以上もあるうか巨大な岩が二つ。その岩間に小竹を立て、わら縄に垂としたの葉をつけただけの素朴な神籬がもうけてあった。

ややあつて古田先生はその巨石神の前で概ね次の様な説明をされた。この立石の巨石に対する信仰は縄文時代から綿々とこの地域の人々によって受け継がれて来ている。ここ出雲に限らず弥生期の文化は突然その地に発するのではなく、それ以前

の縄文人による文化なしには考えられない。この立石の石神はそうした縄文人の信仰が現在に伝えられた貴重な例である。しかし明治期には排仏毀釈の思想が敷衍し、仏教でもないこの石神も排除の対象になり、巨石の前方にあった社屋が壊され、祭儀も表だっては行えなかったが、立石の人々は断つことなく石神を信仰し近年、近在の部落の人々と祭儀を再開するようになった。先生はその祭儀に参加する為に来たことがある

、と。私は悠遠なる縄文信仰が今に続いて歴史の時間の軸を頭の中で強引に伸ばしてみた。今に繋る軸をどこまで遡って伸ばせばいいのか、三千年か四千年か、ただ感嘆の気を吐くのみ。キヤップを付けたままで写真を撮ろうとして同行の人に注意され、我に帰ったことも白状しておこう。

前面の巨大岩ばかりでなく周囲にある無数の苔むした岩一つ一つまでが古代びとから現在に続く信仰の対

象神域である、とのこと。そう言え
ば、立石に着くと古田先生は、早速
土地の方を訪ねられ、来訪を告げる
と同時にこの石神の神域に入ること
の諒解をも得ておられる様子でもあ
った。そしてその事が、この石神が
今もなお生きている証しであると私
には思えてならなかった。

ウルムチ・トルファン

白河市 鳥羽宏幸

八月に、古田先生が講師をされた
シルクロードの旅に参加しまし
た。そのなかで特に印象に残ったウ
ルムチ・トルファンのことを書いて
みました。

天山山脈（標高三千〜四千）のな
かで、とび抜けた高峰・ボクタがあ
る。「神の山」という意味らしい。
真夏でも白雪をいただいている。こ
の山の西北麓がウルムチだ。蒙古語
で「優美な牧場」という意味だと聞
かされた。

ポブラの並木道は砂っぽく、砂漠
に近いのが感じられる。道を行く人
々は、ウイグル族やカザフ、回族で
あり日本人だ。

ウルムチは新興の工業都市であつ
て、古い遺跡は近くにない。天山北
路の交通要衝でありながら、城郭都
市は発達しなかったそう。

ウルムチからトルファンまで、東へ
一九〇キロ、砂漠の真中の一直線な
道をバスは平均百キロのスピードでつ
っぱしる。砂礫のゴビ灘をはしると
右手に湖が見える。地面から塩が吹
き出していてあたり一面真白である。
川辺には、タマリスクの可憐な花が
咲いていた。

トルファンから高昌故城へ出かけ

た。気温は四三度。まわりはゴビ灘
で、その中に小さな土堆が遠くまで
続いている。これは、カナート（地
下水道）、北側には火焰山が見えた。
高昌故城の城壁は周囲五・ほどの
土壁で、高さ十位である。門の中
は建物の残骸が残っているだけで全
体に赤っぽく、玄奘が滞在した頃の
よすがも偲べない。

アスターナの墓地は高昌故城の北
西にある大古墳群だ。この中の二つ
を見た。一つの墓には草花と鳥が描
かれており、もう一つのは、金人、



ボクタをのぞむ

石人、木人、玉人と人物像であつた。
乾燥しているのので、保存設備は必要
ないのであろうか。

火焰山の北側をまわると、ベゼリ
ック千仏洞。トルファンの東方五七
の所にある。川の曲がる外側の崖
の中腹に石窟があり、後方にまるで
富士山を真赤にしたような山がある。
壁面は完全な物は一つもないと聞
かされた。

交河古城は、トルファンの西十
の所にある。城内には完全に残って
いる建築物はほとんど無い。戦乱の

せいもあるだろうが、日干レンガで
は無理もなからう。
生水の飲めないこの地方では、ハ
ミ瓜が著さにカラ／＼になったのだ
をうるおしてくれた。名産品の葡萄
酒もなか／＼の味で、団員の間でも
売れ行きがよかった。特に白葡萄酒
がよいようだ。

陸と陸（その一）

武蔵野市 毛利一郎

陸という漢字の和訓にクガとヲカ
がある。

クガは国処であつて、クニカ
クヌカ——クガと転音する（沢瀉辞
典）。クムカ、クカという古訓もある
（藤堂辞典）。人名となつたクニカと
しては桓武平民を起した高望王の子
に平国香がある。久我さんという姓
玖珂郡や久賀町（山口県）、国賀海岸
（隠岐島）という地名なども国処、国
処から出ていよう。国すなわち稲を
生む奇しき土地クニのある処という
意味で、稲作開始後の古代人がその
テリトリとして意識する陸がクガ
である。

クニとは人間の文化的営為によつ
て馴服された土地を、周囲の野生的
世界すなわち自然的存在としての土
地すなわちツチから区別している語
である（民族学者大林太良氏、吉田
敦彦氏の説）。この「人間の文化的営
為」を稲作を中心とする営みだとす
れば、私もこのクニ説に賛成である。
九州、畿内、東国に住む土蜘蛛、大
和の吉野川上流や常陸に住む国栖、
国巢、国主（クニス、クズ）は、古
事記や日本書紀に出る異種族である
が、土蜘蛛すなわちツチは天つ神の
御子ないし皇軍によって誅殺される

ものであるに對し、国栖すなわちク
ニは天つ神の御子に對し恭順である。
ここに大林氏らのクニ、ツチの分類
説が出て来るが、稲作によって立つ
ヤマト政権はその稲作文化を関東、
東北へ拡大して行った。それに服し
たのが国栖ではなかったか。

常陸風土記の茨城郡の国巢には、
「俗語、都知久母、又云、夜都賀波
岐」とあり、国巢をツチクモと言
うことがあつたわけで、両者は同種、
恐らく古代アイヌ民族、ただヤマト
政権に服するか否かで特に国巢、土
蜘蛛と呼び分けたのであろう。又云
ヤツカハギ（八拳脛）とは足の長い
ことで、神武紀に土蜘蛛は「身短而
手足長」とあり、古代人骨の研究か
ら古代アイヌ民族の身体的特徴は、
強弓を引くに適した長い手、早く走
れる長い足であった。この身短而手
足長は節足動物の蜘蛛の特徴でもあ
る（琉球語学者中本正智氏、国文学
者神田秀夫氏の説）。それが稲作文化
に服してクニに栖むようになったの
をクニスといつたのであろう。

さて稲を生む土地クニが文化の始
りであるとすれば、クニは弥生人に
とっては歴史の始まりでもあつたろ
う。天地開闢の初めに「天地の中に一
の物生れり。扶藁牙の始くにて、す
なはち神と化爲るを、国の常立の尊
と号す」とのべるのは日本書紀本文
で、天地開闢の歴史はクニの常立と
いう神様によって始つた。葦原を改
造した奇土に葦の若芽のように生え
出るといふのは稲が生え出るイメー
ジではないか。稲の穂もカビ（また
はカヒ）という。祝詞祈年祭に「初
穂をば千穎八百穎に奉りおきて」と

ある。歴史の初源にこのようなカビの生えるクニをおくということは、稲作弥生人のごく素朴な思想を見るように思う。

この若芽の意のカビが「生成、繁殖、生命力の発露」としてカミ、神の語源であろうとする言語学者村山七郎氏の説に私も賛成である。カビとカミが転音の関係にあることを私はMBの法則と呼んでいる。額をカミとも読んだことは手頭という万葉の借訓の例からも知られる。タカミとは剣の柄のことで、日向国宮崎郡には劍柄村という地名があったが、後人改めて高日村といった(沢瀉辞典)。ここにもミとビのMBの転音がある。

古事記は国之常立の神に先んじて天之常立の神というのを立てたが、これは皇祖神アマ照が海人族の海神から天の神に変わってゆくという動きの中で発生したものであろう。

陸の項の最後に玖訶瓮(允恭記)探湯瓮(允恭紀)について考えない。瓮とは酒食を入れ、あるいは煮たきをする容器で、現代でもナベのべに残っている(ナは魚、菜)。金属器については金瓮という語があり、鼎の軽量を問う」という故事の鼎は三つの足がついているのでアシカナエともいう、そのカナエである。従ってクカへは土器で、弥生人がそのテリトリの国処で作った弥生土器、および弥生土器から直接発展して四世紀ごろから作られたといわれる土師器など国処瓮と呼ばれたろう。盟神探湯は神聖な熱湯に手をつけて正邪を判定する古代の風習(大陸の少数民族に残存)として有名である。

論語季氏篇にも不善をみわけ探湯として出ているので、もと中国的なものか(沢瀉辞典)とされる。和語クカチは国処において不善を戒つという意も重ねているかも知れないが、タチは元米は湯がわきたぎる意(広辞苑)の立つて、国処に湯がわくことではあろう。神迎えのため湯立の神事というのが愛知県東栄町の花祭など各地に残っており、クカチのなごりといわれる。

国会に九州王朝説初登場

衆議院で正森委員が言及

去る四月一八日、衆議院大蔵委員会において、いわゆる天皇在位六十年記念貨幣法の審議の際、共産党の正森成二委員が、中曾根総理大臣の「天皇を中心とする二千年の伝統と文化の日本歴史」の理解発言を批判し、九州王朝、出雲王朝及び銅鐸国家の存在並びにそれ以前の縄文国家の歴史に觸れ、天皇一元的な歴史観を非とする質問を展開した。

会議録を検討すると、古田九州王朝説(含九州年号)の学界での位置づけに誤りがあるほか、古田説の旧来史学に対する方法上の優位性や論証の精緻さに触れておらず、聞く者に単なる一説としか思わせていない弱点がある。さらに、質問者の視点が、天皇在位六十年式典への反対にあるため、政治的な追求に急いで、歴史の真実を探る方向が出ていない。しかし、私の知る限り、九州王朝説の国会への初登場であり、他への波及を期待したい。会議録の当該部分を以下転載する。

第一百四回国会衆議院大蔵会議録 第十五号(昭六一・四・一八)16頁

○正森委員……(前略)……

また、歴史をひもといてみますと、近畿を中心とする天皇が権力を持つておられる王朝だけでなしに、それ以前に九州王朝がありましたし、また、竹下大蔵大臣の御出身に近い出雲にも、オオクニヌシノミコトを初めとして出雲王朝がありました。また、歴史の示すところでは、大和の天皇王朝の成立する前に多数の銅鐸が見られました。天皇家が成立いたしましてから大和では銅鐸が消滅してあります。これは、多くの歴史家も銅鐸国家があったというように見ておるわけでありまして、竹下大蔵大臣はかつて別のことでワン・オプ・ゼムという言葉をよく使われましたが、天皇家といえども日本歴史全体から見れば出雲王朝、九州王朝あるいは銅鐸国家等々の古代においてはワン・オプ・ゼムであって、しかもそれ以前に縄文時代、弥生時代、古墳時代という、日本民族には悠久の歴史があります。そういうものをあたかも無視するような発言というものには、歴史の真実をあらわすものではないのではありませんか。

また、多くの歴史学者の示すところでは、天皇の大和朝廷がまだ年号を持っていない時代は九州王朝は律令を持ち、そして元号を持っておった。善記、こういふ元号が五二二年に善記元年といふことで出ておりますが、その後大長三年、紀元後七〇〇年まで百七十九年にわたり三十二個の元号を使っていた九州王朝の存在がすべての歴史書で表明されております。

また、播磨の國に明要寺というお寺があります。現在の神戸市ですがこの明要は九州王朝の元号であります。

こういう点を考えてみますと、中曾根総理の言うところの皇国史観というものは、日本の科学的な歴史から見ても正統性をかち得ないという面があるのではないのでしょうか。……後略……

○竹下国務大臣 民主主義の時代において正森さんの指摘される意見をここで一つ一つ反駁しようなどという考え方を私は毛頭持っておりません。……中略……そのときの天皇のお姿なりお言葉なり、私にとつては忘れ得ない天皇尊崇の念として永遠に持ち続けたいものだといふふうには考えております。

(編集部)

古田先生と行く古代史の旅

◎河内・大和の古代史

期日 11月1日(土)〜3日(祭)

費用 八八、〇〇〇円

主な見学地 昨年発掘されてそのみごとな金銅製鞍に驚かされた。藤ノ木古墳。大陸系の青銅製腕輪や玉が出土した。わが国最大の方形周溝墓。加美遺跡。今年の調査で被葬者が疑われた。継体陵。つい最近(7月中旬)発掘された最古級の古墳と思われる。芝ヶ原12号墳。など、昨年から今年にかけての新しい発掘の遺跡を中心に訪ねます。

お申し込みは、朝日トラベルへ。(03)五五二一七四五